

生活世界の「人間的基盤」をもとめて

— 「共同のコミュニケーション」と「社会的基盤」へのコミュニケーション論的アプローチ—

A Study of *Human Foundation* in Lifeworld: *Communal Communication* and
Communication Approach to Social Foundations

上柿崇英

UEGAKI, Takahide

はじめに

今日重要な論点である環境危機および社会病理という問題を、統一的に論じるためのフレームワークは、どこに準拠点があるのだろうか。私はそこに、「社会的基盤」をめぐる問題があるのではないかと思う。これまで多くの環境思想が提起してきたのは、環境危機を引き起こした根元にあるのが近代ヨーロッパに端を発する自然観や世界観であるという認識であり、突き詰めれば、このような世界観に基づいて形成された社会システムのあり方そのものを再構築せねばならない、ということであった。そのような社会システムとは、どのようなものであろうか。本稿でみていくように、それは「システム」によって強力に統合される社会システムである。しかし、そのような社会のあり方は、環境危機とは異なる側面である、社会病理や福祉の問題といった社会の再生産そのものの持続性からも問い直されてきた。ここに共通の基点があるのである。

そもそも、私たちが人々を統合させている機構全体を“社会システム”と呼ぶこと自体に違和感を覚えないのは、それだけ現代社会がシステム的に統合されているということを示している。私は混乱を避けるために、人々を統合させる社会的機構の全体を「社会的基盤 (social foundations)」と呼ぼう。そして社会的基盤を構成する個別の統合基盤を「社会基盤 (social foundation)」として、それから区別しよう。システムはあくまで、ひとつの社会基盤であり、現代の社会的基盤の主要な構成要素なのである。そうすれば、われわれが直面しているラディカルな問題が、あくまで社会的基盤の問題であり、その基盤の構成をめぐる、システムの問題を乗り越えるための新しい様式をいかに構築していけるのか、という問題であることが明確になるだろう。

私は本稿において、システムとは異なる「人間的基盤 (human foundation)」を社会的基盤の中に構築していく必要性を、コミュニケーションの概念を軸に論じてみたい。コミュニケーション論的に論じるにあたって、私はハーバーマスの社会理論を批判的に導入する。社会的基盤の問題をコミュニケーション論的に論じることによって、システムの問題を環境危機だけではなく、社会病理の問題と理論的に結合させることができる。そして社会的基盤の構成における、システムとは異なる社会基盤の存在を、「生活世界」として浮かび上がらせることができるだろう。

今日、システムの問題を乗り越えるアプローチは、システムとも親密圏とも区別される、生活世界の公共的領域＝公共圏の活性化として盛んに論じられている。しかし公共圏という社会基盤は、コミュニケーション論的には、討議の合理性に基づく流動的で抽象的な基盤である。公共圏として論じられる領域は、より踏み込んで、「人間的基盤」と区別される必要があるだろう。人間的基盤は、了解過程の「合理的なコミュニケーション」ではなく、人間の「共同のコミュニケーション」に関わっている。この点を論じるために、私は「進化心理学」からコミュニケーション概念を深化させよう。コミュニケーションを根源的な次元から深めていくことで、共同のコミュニケーションの重要性だけでなく、人間関係の

統合様式における「具体性の問題」、そして社会基盤の制限要素である「規模の問題」を明らかにすることができる。公共圏とは区別される人間的基盤は、具体性を持った領域であり、規模の制限を内在している。システムの問題を乗り越えるためには、公共圏だけでなく人間的基盤へのまなざしが必要であり、特に人間的基盤の中でも「コモンズの基盤」と公共圏の相互補完的なあり方が重要な問題となる。私はそのような社会的基盤のあり方として「多層的生活世界—システム」軸という、ひとつの展望を描こうと思う。

1 近代の社会的基盤としての「人間—システム」軸

(1) 近代批判としての環境思想—「システム」とは何か①

先に触れたように、これまで多くの環境思想では、ヨーロッパ近代の自然観や世界観が環境危機を招いた根本にあると考えられてきた¹。近代に対抗するエコロジ的な自然観や世界観の構築こそ、環境危機を克服する鍵だとされてきたのは、そのためである。それでは、そのような近代的世界観と社会的基盤の関係は、どのようなものだったのであろうか。

この視点で最も簡潔な説明は、ノーガードの見解を引き合いに出すことで理解できよう²。ノーガードによれば、近代の世界観は、原子論、機械論、普遍主義、客観主義、一元論という、「形而上学的・認識論的前提」によって構成されていた。そしてこの前提は、進歩という、もうひとつのイデオロギー的な方針によって徹底的に推進されたのである。この近代的世界像は、当然社会統合のあり方にも強い影響を与え続けた。そしてきわめて多様な要因が絡み合いながらも、システムによる社会統合を加速させ、それを正当化する役割を果たしたのである。

ここで改めて、本稿で想定している「システム (system)」という概念の概観を示しておく必要がある³。本稿でシステムという場合、それは独自の統合原理を持ちながら人間と人間の間を制御する社会的機構を指しており、具体的には「市場システム」と「行政システム」を指している。現代社会では、この二つのサブシステムが、強力なシステムとして突出しているのである。市場システムとは、市場経済のネットワークであり、このネットワークにおいては、市場を核として、きわめて多様な人間と人間、あるいはモノとモノが交差する。行政システムとは、組織的な権力・命令の伝達によって一括して社会をマネジメントするための社会的機構であり、きわめて多様な人間と人間が管理と依存の関係を構成する。前者は財や人的資源の機械論的な分配機構であり、後者は命令の機械論的な伝達機構である。これらが持つ統合原理は、前者は市場原理、後者は官僚制であり、この原理によってきわめて多数の人々の統合が可能となる。

この二つのサブシステムは互いに補い合う形で、特に 19 世紀の急激な産業社会化に伴って大規模化していった。ノーガードも指摘しているように、この頃近代の世界観を突き動かしていた進歩のイデオロギーは、経済発展—つまり単位時間当たりの物質的な生産力と富の蓄積を最大化させること—と同一視されるようになり、この目標が社会の至上命題となった。

もっとも市場システムと行政システムの大規模化は、この目標の推進するために必要な

ものであり、先の近代的世界観にも非常に相性の良いものであった。経済発展を推進するためには、伝統的な共同体や社会基盤を一端解体させ、きわめて多数の人々を一括して効率よく統合するための新しい社会基盤が必要だったのである。そしてシステムのあり方の根底には、“科学的に正しい原理”を用いれば、それはどこでも一般的に適用できるし、そのようにして一元的に、普遍的なやり方でもって、機械的かつ客観的にマネジメントすることが、最も大きな成果を期待できる(効率的)、という考え方があった。それが先の近代的な世界像と結びついていることがわかるだろう。そして事実 20 世紀を通じて、物質的な生産力や物質的な富の蓄積という面では、われわれが知るように、大成功を収めたように見えたのである。

しかし今日このようなシステムを核とする社会的基盤のあり方は、批判的となっている。もともと環境思想では、無限の進歩または無限の開発を前提とした世界観、または自然に対する征服的な世界観を批判するものが主流であったが、社会的基盤に着目する場合、しばしば指摘される論点は、①大規模なシステムは方向の修正がきわめて難しい、②また多元的に対処すべき問題に対応できない、という点である。環境や生態系、物質循環に関わる問題は、本来、リージョナルに、多元的に、状況依存的な脈絡をもつものである。ここから導出されるようなニーズは、近代的世界像の前提とはまったく相容れない。システム統合による社会基盤の限界、つまり近代的な様式に基づく社会的基盤が環境思想の視点から批判されるのは、ここに最大の理由があるように思える。

(2) 社会の再生産に伴う困難—「システム」とは何か②

しかしこのシステムの問題は、環境危機とはまったく別の側面である、社会の再生産に関わる困難としてもこれまで論じられてきた。つまり、疎外や物象化、アノミー、意味喪失といった、社会病理との関連性である。社会病理と社会的基盤の関係については、これまでの学問的な長い系譜があるが、ここでは「コミュニケーション」をキー概念にシステムとの関係を論じているハーバーマスの枠組みを使って見てみよう⁴。ハーバーマスは、これまでマルクス主義的な社会理論や社会学が論じてきた論点を、コミュニケーションをめぐる社会病理として統一的に論じた。

ハーバーマスによれば、まず社会的基盤はシステムによって統合される領域だけではなく、コミュニケーションによって統合される「生活世界 (lifeworld, die Lebenswelt)」という二つの領域から考えなければならない。社会病理の問題は、この生活世界との関連性に着目してはじめて、問題の本質を明らかにできるというのである。われわれがみてきたように、近代以降システムは、経済サブシステムと行政サブシステムの肥大化という形を取ってきたが、現代の社会的基盤の内部では、生活世界とシステムが対立している状態にある。そしてハーバーマスはシステムと生活世界を区別するために、その統合様式に着目する。すなわち、システムは人間と人間の統合に貨幣や権力を媒体とするが、生活世界は人間と人間の統合に、コミュニケーション過程に生ずる「了解 (understanding, die Verständigung)」が媒体となるというのである。

ここで、ハーバーマスが「コミュニケーション」という場合、そこには二つの様式が念頭におかれていることを補足しておくべきだろう。まずハーバーマスにとって、コミュニケーションの第一義的な意味は、合意形成の過程を含む言語行為というものである。すなわちコミュニケーション参加者は、特定の発言にたいして、客観的世界・社会的世界・主

観的世界それぞれの妥当性の局面から、その発言に対して批判や合意を行うことができる。このような過程を通じて合意を目指すコミュニケーションを、彼は「了解志向のコミュニケーション」と呼ぶ。それに対して、コミュニケーションを合意ではなく、何らかの成果を念頭に道具的に用いる場合、彼は前者と区別して「成果志向のコミュニケーション」と呼んだ。

すなわち、われわれが言語を媒体にした相互行為としてコミュニケーションを行う場合、この両方のうち、もっぱらどちらかを行っていることになる。しかしこの区別が重要になるのは、システムと対置した概念である先の生活世界が、あくまで了解志向のコミュニケーションによって統合される領域であるからである。ハーバーマスはこの点をより突き詰めて、次のように考えた。すなわち生活世界はわれわれにとって、世界を理解するための「知のストック」として重要なだけでなく、人間と人間との調整を行い集団の同一性を確立する「社会統合」や、個々の構成員が集団との同一性を確保していく「社会化」という過程を、コミュニケーションによって行う領域である。私たちにとって本質的な社会の再生産とは、まさに生活世界の再生産過程であり、したがって、コミュニケーション的に統合される基盤が重要なのは、それがまさに文化的再生産や社会統合、社会化という、われわれに必要な不可欠な社会的過程を含むからだ、というわけである。

それでは、システムと社会病理の関係はどのように説明できるのであろうか。まず、先に触れたように、システム統合は、あくまで言語を媒介とせず、貨幣や権力といった一元的な価値に基づく統合様式であった。この様式によって、システムでは、合意の破綻やコミュニケーションのプロセスを回避し、効率よく大規模な統合が可能となる。しかし、あまりにシステムが肥大化してしまうと、つまりわれわれの生活のあらゆる局面にシステム的な過程が入り込んでしまうと、了解を通じて再生産される局面は極端に縮小してしまう。ハーバーマスによれば、システム統合が強力になればなるほど、コミュニケーション過程は了解志向のものから成果志向のものへ比重を強めることになる。現代社会では、コミュニケーション的に統合される領域が縮小し、その役割の多くをシステムが担っている。そしてコミュニケーションが成果志向に傾いていくことで、生活世界で果たされていた「社会統合」や「社会化」の過程が不全となり、アノミーや意味喪失、精神病理といったものが生まれる。また、人がモノ化する物象化という現象がおきる。ハーバーマスの説明は、そのようなものであった。

(3) 社会的基盤の構成軸としての「人間—システム」軸

以上を通じて、社会的基盤におけるシステムの問題性が、持続不可能性や社会病理との関連性で、ある程度見えてきたように思える。一端ここで、われわれのフレームワークを整理しておこう。

まず近代的世界像に裏打ちされた市場システムと行政システムは、きわめて多数の人々を一元的に効率よく統合できる社会的機構として、19世紀以降“進歩＝経済発展”というイデオロギーのもと、急激に発達してきた。これをコミュニケーション的に述べるならば、人間と人間との調整の問題が、ますますシステム的な調整によって置き換えられていった、というように述べることができる。すなわち、現代の社会的基盤は、システムと生活世界という二つの社会基盤を持ちながらも、システムを社会的基盤の中核にすえることで、これまでにない物質的な富の拡大を可能にしたのである。

このような社会的基盤は“生活者”の視点に立つとき、次のように言うことができるだ

ろう。第一に、システムが大規模化したことによって、人々は生活の隅々までシステムの調整に頼らざるを得なくなっている。具体的にいうならば、人は生まれながらにして労働者や納税者としてシステムに参入せねばならないし、生活に必要な消費や廃棄、インフラはすべて市場システムか行政システムを媒介しなければ成り立たない状態にある。

第二に、そこではきわめて多数の人々がシステムの“末端”に結び付けられ、機能的に分化・調整されているのだが、人間と人間を結び付けているのは、システムを媒介とした“顔の見えないブラックボックス”である。具体的に言うならば、人々は自分の食べるものがどこから来て、自分の捨てるものがどこへ行くのかまったく理解することはできないし、他者に多くの依存をしながらも、その他者をまったく抽象的な次元でしか知ることができない。すなわち、システムが高度に発達した社会的基盤においては、人間関係の統合様式は、「抽象的かつ間接的」なものとなる。この視点は、社会的基盤における人々の生活様式自体の硬直性を示唆しており、なぜ大規模なシステムが硬直化し、警告を発している個別の問題への対処能力を失うかを理解する、ひとつの鍵となる。なぜならシステムのひとつの末端で問題が生じたとき、目に見える脅威を理解できるのはその末端周辺の人々だけであるが、システムに結合されるすべての人々が実際には少なからず問題に関与せざるを得ないからである。

第三に、今日コミュニケーション過程に貨幣や権力といった媒体を関与させずに済む領域は、家族や友人といったごく限られた領域—つまり「親密圏」に縮減してしまっている。ここでの人間関係の統合様式は「具体的かつ直接的」であるが、それが一步外に出ることで、一気に「抽象的かつ間接的」な貨幣関係、あるいは権力関係といったシステム統合に跳躍していくのである。

ここで、このような社会的基盤の構成を、改めて“「人間—システム」軸を中心を持つ社会的基盤”として定義しよう。ここには、生活世界の社会基盤が縮減し、人々がほとんど直接大規模なシステムの基盤に依存・管理される、という意味を込めている⁵。

(4) NGO・アソシエーションネットワーク・公共圏—「人間—中間的基盤—システム」軸によるアプローチ

これまでの議論を通じて、ラディカルな問題点が、社会的基盤の「人間—システム」軸にあることを示してきた。それでは、われわれが目指すべき社会的基盤のあり方や、システムの問題を乗り越えるために必要な展望はどのように描けるのだろうか。実は、すでに多くの分野によって、その“ひとつの方向性”が示されている。

90年代以降、公共哲学や公共性論、ソーシャル・ガバナンス論といった新しい議論が急激に注目されるようになったが、このことがそれを理解する鍵となる⁶。公共哲学や公共性論は、従来の公的領域と私的領域の二元論を批判し、新たに公共的領域の概念を導入することで、メディアや言説空間といった公共圏や、公共的領域それ自身を総合的に位置づけていこうとする議論である。他方ソーシャル・ガバナンス論は、市場セクターおよび行政セクター主導のガバナンスの失敗を克服するために、新たにNGOなどによる公共的セクターを導入し、それを核としたセクター間のコラボレーションによるガバナンスを、これまで提起してきた。これらの議論を細かく掘り下げていく余裕はないが、重要な点は、これらの議論の展望に共通する視点があるということである。

すなわち、公共的領域、公共圏、公共的セクターと名称は違うが、これらの議論では、

社会的基盤の中に市場システムや行政システムとは異なる新しい社会基盤の構築の必要性を提起する、という共通点があるのである。また、NGO やボランティア、アソシエーションネットワーク、など、システムとは異なる次元で社会的サービスを提供する市民組織に多くを期待しているのも共通する。これらの議論が社会的サービスの問題を全面に押し出していることは、システムの硬直性が、環境と同様、もはやわれわれの福祉の分野にも十分対応できないことを示唆していて興味深い。多くの論者は、批判の矛先が結局は近代的世界像や「人間—システム」軸の問題に向かっているのだということを必ずしも自覚していないが、実際はそうなのである。われわれはこのような社会的基盤の展望を、人間とシステムの間、システムとは異なる何らかの新しい社会基盤の構築を提起するものとして“「人間—中間的基盤—システム」軸による展望”と呼ぼう。

それでは、先のハーバーマスの場合はどうであろう。ハーバーマスは、システムの問題を乗り越える鍵を、生活世界に担保された「コミュニケーション的合理性」に見出している。コミュニケーション的合理性は、論拠の妥当性に基づく合理的な議論を行い、それによって合意形成を可能にするための条件である。実はここに文化的近代の合理性が関わっている。近代的世界像では、客観的世界・社会的世界・主観的世界それぞれが分化しており、それを分離して考えることができるのだが、これは近代を経てはじめて整った条件である。これによつてはじめて、コミュニケーション参加者は、論拠の妥当性を合理的に判断し、批判し、合理的な形で合意形成をすることができるようになった。

つまりハーバーマスの見解においては、近代はシステムの肥大化をもたらしたものの、他方では、合理的なコミュニケーションを可能にする条件ももたらした、という逆説を持つのである。ハーバーマスは「新しい社会運動」を引き合いに出しながら、このような討議の合理性を十分に発揮できる社会的基盤、つまり公共圏を整備し、システムを制御していくための通路を確保していくことこそが、問題解決の道につながると考えている。彼が後年深化させた公共圏論は、この視点を広げたものであった⁷。すなわち、地域的・個別的問題を討議の遡上に上げ、自発的なアソシエーションを形成する母体となる公共圏は、合理的なコミュニケーションによって統合されるがゆえに、システムの問題を乗り越える鍵となるのである。

そうすると、ハーバーマスのモデルは「中間的基盤」に公共圏が当てはまり、「人間—公共圏—システム」軸という展望である、ということもできよう。しかしわれわれの視点で重要なことは、コミュニケーション論的に見たときに、このような形で「中間的基盤」をさきのような合理的なコミュニケーションによる統合領域として位置づけてしまつてよいのかどうか、という問題である。確かに、先にあげた公共哲学、公共性論、ソーシャル・ガバナンス論が提起しようとしている「中間的基盤」も、“自由な個人が自発的に参加していくアソシエーション”の母体という色彩を強く帯びており、ハーバーマスのモデルと基本的には変わらないと考えてよいだろう。前者は主に社会的サービスの提供者としてそれに期待し（公共圏の社会的機能）、後者は主に政治的な申し立てを行っていく主体としてそれに期待を寄せている（公共圏の政治的機能）という違いはあるが、両者はともに合理的コミュニケーションによって結合する公共圏のモデルに位置づいているのである⁸。

(5) 「人間の基盤」というまなざし

これまで本章では、社会的基盤の「人間—システム」軸の問題性を、コミュニケーション

ン論を織り交ぜながら見てきた。これまで指摘してきたように、システムはコミュニケーションとは異なるシステム統合によって統合力を発揮する。またそこではコミュニケーションによって統合される生活世界の領域が限られたものとなり、この事態が様々な問題を生じる原因になっていたのであった。そして「人間—中間的基盤—システム」の展望では、中間的基盤において合理的なコミュニケーションに基づくアソシエーションなどが、政治的機能や社会的機能を果たす。

しかし考えてみて欲しいのだが、例えば公共圏における人間と人間の統合様式は、コミュニケーションに媒介されていたとしても「抽象的かつ間接的」な側面を強く持っている。これはシステムにおける様式と同じであり、生活世界で残されている親密圏のように「具体的かつ直接的」な様式とは対極的である。しかも、ハーバーマスのコミュニケーション類型は、了解志向のコミュニケーション（合理的なコミュニケーション）と成果志向のコミュニケーションという二元的なものであり、これをそのまま引き継いでしまうと、社会統合や社会化といった再生産に関わる多くの物事は、先の合理的なコミュニケーションに媒介されることになる。

しかし結論から述べれば、私は了解志向のコミュニケーションとも成果志向のコミュニケーションとも区別されるべき、もうひとつの「共同的コミュニケーション」なるものがあるのではないかと思うのである。われわれが本当に必要としている社会基盤は、そのような共同的コミュニケーションに基づくものであって、合理的なコミュニケーションを基礎におく公共圏をモデルに還元できるものではないのではないだろうか。私は共同的コミュニケーションによって統合される社会基盤を、公共圏とは区別して「人間的基盤」と呼ぶことにしよう。人間的基盤という言葉には、人間が人間として人間らしく生きるために必要な社会基盤であるという意味を込めている。しかしこの論点を明らかにするためには、コミュニケーション概念そのものを掘り下げて考えていく必要があるだろう。

2 根源的なコミュニケーション様式としての「共同的コミュニケーション」—社会的知能の視点から

それではここで一端社会的基盤の考察からはなれ、共同的コミュニケーションの概念を明らかにするために、コミュニケーションを生物学的基礎に基づく根源的な次元まで掘り下げながら考えてみたい。今回その足がかりにするのが、進化心理学および、その周辺領域が近年盛んに論じている「社会的知能」という考え方である。

(1) 「社会的知能」のまなざし

コミュニケーションをめぐる概念設定は、これまで言語学や記号論などを中心に、主にシンボルを媒介する過程として哲学的に研究されてきた。しかし 80 年代以降を中心に心理学の分野で、知能や認識の側面からコミュニケーションを捉える基礎が急速に進展してきた。例えばチョムスキーの「普遍文法」が示唆したように、人間には言語を獲得していくための特化した知能の領域が生得的に備わっているらしいということ、また人間がコミ

コミュニケーションをする際に、思考の次元では意識化できない生得的な文法を使用しているということを、心理学者は明らかにしている。例えばピンカーはそのような生得的な言語能力を「言語本能 (language instinct)」と呼び⁹、例えばジャッケンドルフは思考の生得的な文法を「メンタル文法 (mental grammar)」と呼んでいる¹⁰。

上記の例からも理解できるように、コミュニケーションの問題は、ますます生物学的基礎との連関において理解する必要が出てきているといえる。そしてわれわれの関心から最も重要だと思われるのが、「社会的知能 (social intelligence)」をめぐる問題である。もともと、人間に特徴的な知能というのは、目的的に複雑な道具製作を行ったりする知能、つまり技術的に環境を改変し適応できるという「技術的知能」という側面から捉えられてきた。しかし近年、人間に特徴的な知能の発達を促したのは、環境への技術的な適応ではなく、むしろ集団生活における他個体とのコミュニケーションを通じて形成される、社会的環境への適応だったのではないかと、という視点が進展してきたのである。このような言語や思考を含む知能の問題を、改めて進化論的に論じようとする一連の議論は、通常「進化心理学 (evolutionary psychology)」と呼ばれてきた¹¹。

この「社会的知能」という言葉をはじめて心理学の分野に持ち込んだのはハンフリーだったといわれている¹²。後の文献によれば、ハンフリーは、非常に単調な生活スタイルを送っているにもかかわらず、一見不必要とも思えるほどの大きさの脳を持つ類人猿である、ゴリラを観察している中でこのアイデアを思いついた。脳は肉体が大きくなればその分だけ必要となる組織ではあるが、非常にコストが高いため、肉体の維持の必要以上に脳が大きくなることは、それに対して何らかの淘汰圧があったとしか考えられない。とはいえ脳の肥大化を、何らかの問題を対処するために必要な“知能”と関連させて考えるならば、単調なゴリラの生活環境には一見まったくそのような契機は見当たらないのである。しかし、彼らの社会環境に目を向ければ、それぞれの個体は集団全体を維持すること、そして他のメンバーを出し抜くことの両方をこなすために、複雑な問題に常に対峙しなければならないことがわかる。誰がどの順位にあり、誰が誰と毛づくろいをするのか、誰が最初に食べ物へ近づくか、そして誰が誰と交尾できるか、刻々と状況が変化する中で、彼らは推論し、対応しなければならない。

もちろん当初、社会性の強い大型類人猿がこのような社会的知能を持っているということも、実際に行使しているということも裏付けるデータはなかった。しかし 80 年代を通じて、この仮説の支持を示唆する研究成果が、サル類や類人猿の、特に野外観察を中心とした実証的研究によって、かなり蓄積されるようになった。

(2) マキャベリの知能

その分野の第一人者であるバーンとホワイトゥンは、サル類や類人猿の、“戦略的に相手を欺き、利用し、出し抜き、同盟を結ぶ”、といった様子が、『君主論』でおなじみのマキャベリの議論を思わせることから、彼らが持つ社会的知能を「マキャベリの知能 (machiavellian intelligence)」と名づけた¹³。バーンによれば、霊長類の中でキツネザルなどの曲鼻猿類やメガネザルの仲間を除く、多くのサル類と霊長類に「戦略的なだまし」が確認されているという。しかし圧倒的に多いのは、オナガザル科のヒヒの仲間と、チンパンジーであるらしい。

バーンが取り上げている例を紹介しよう。これはクマーという研究者が観察したマントヒヒの事例である。一メスが 20 分かかって少しずつ座る位置を変え、2 メートルあまり移

動して石の後ろに落ち着いた。そして若いオスの毛づくろいをはじめ。しかしこれはリーダーではない大人のオスには許されない行為である。クマーが観察していると、近くのリーダーオスからは、メスの背中や頭は見えても、手や顔が見えない位置にいたことが分かった。リーダーには、メスがいたことは分かっていても、毛づくろいをしていないことは分からない。メスがリーダーの動きにあわせて異常なほどゆっくりと場所を変えていたことから、クマーはメスがリーダーの視点を十分推測していたと考えた。

もうひとつの例は、バーン自身が観察したヒヒの例である。子どものヒヒが、ある貴重な食べ物を手に入れたばかりの大人のメスに偶然出くわした際、周囲に別のヒヒがいないことを確かめると、叫び声をあげた。そのメスより順位の高い、子どもの母親が駆けつけると、子どもが攻撃されたと思い、そのメスを追撃する。子どものヒヒは二頭がいなくなると悠々とその食べ物にありつけた。バーンによれば、この例は、子どものヒヒが、勘違いを推測しながら母親を社会的な道具として利用したものであるという。

このように「隠す」、「社会的な道具を用いる」、といったものの他に、「イメージを創る」(捕食者の警戒の合図を故意に利用するなど)、「注意をそらす・魅惑する」といった行為が類人猿やサル類には見られる、とバーンは述べている。

ただし、バーンによればサル類(主にヒヒ)と、チンパンジーやゴリラなどの類人猿(事例の多くはチンパンジー)では、この「戦略的なだまし」でも大きな違いがあるという。それは前者が主に「相手の視点の推測」を中心としたものであるのに対して、後者が主に「相手の心的状態を推測」することで初めて可能になるようなテクニックを使っているという点である。バーンは類人猿が心の状態を推測できる証拠として、「欺かれたときに独特の反応を示す(憤慨するなど)」、「欺きへの対抗措置として欺きの戦術を取る」、覗き見るなど「新しい行動で対抗する」、という点を上げている。前者は、過去の経験のサンプルを結びつけることによって達成した学習として説明できても、後者は試行錯誤の結果習得したものとは考えがたい。むしろ、相手の意図を理解しており、相手の考えを予想していたと考えるほうが、筋が通るといえるのである。

バーンやホワイテアンなどの研究から分かることは、サル類がすでにある種の社会的知能を有しており、野生の状態ですべてを行使しているということである。また、類人猿の場合は、ヒトには到底及ばないものの、相手の心的状態や意図を推測・予想し、計画を立てる能力がある、ということであろう。このような社会的知能を進化心理学では「心の理論(theory of mind)」という。

(3) 心の理論

社会的知能をめぐる研究の中で、ヒトの持つ心の理論についても、すでに研究が蓄積されている。主な研究者としてレスリーとバロン＝コーエンがいるが、ここではバロン＝コーエンの説明について若干取り上げてみたい¹⁴。

ヒトの心の理論は、主に自閉症児の研究を通じて、「モジュール(module)」として内在していることが分かっている。モジュールというのは、もともとはフォーダーが用いた概念で、専門的に分割された生得的知能を指している。一般的には、特定の脳の箇所障害が生じたとき、特定の知能だけが失われる場合にモジュール性があるといわれる¹⁵。

バロン＝コーエンによれば、自閉症という病気は先天的で遺伝的な基礎を持っている。

てんかん、知的障害、脳の病理などと結びつくこともあるが、共通しているのは、社会的な状態において、正常なアイコンタクトができない、正常な社会的意識や適切な社会行動ができない、また孤立し、一方的に物事にに関わり、社会的な集団に参加できない、そしてごっこ遊びができない、という症状を見せる。このことを最も単純化して述べれば、自閉症児は、心の理論を通じて他者の心を読むことができない。

バロン＝コーエンが着目するのは、「誤った信念」に関するテストに対して、自閉症児がごとごとく失敗するということだった。例えば、ある子どもがおはじきで遊んでいて、別の部屋へ出かけたところ、他の子がおはじきを箱にかくしてしまった。もどってきた子がどこにおはじきを捜すのか？という問題に対して、ほとんどの正常児とダウン症児が「もとの場所」と正解するのに対して、自閉症児は少数のものしか正答しなかった(箱の中と答えたりする)。「誤った信念」を理解するためには、自分の信念と他者の異なった信念という矛盾するイメージを同時に保持しなくてはならないのだが、自閉症児にはこれができないのだという。

バロン＝コーエンは幼児などの研究から、心を読むためのメカニズムを四つの機構で説明している。ID (Intentionality Detector 意図の検出器)、EDD (Eye-Direction Detector 視線の検出器)、SAM (Shared-Attention Mechanism 注意共有の仕組み)、ToMM (Theory of Mind Mechanism 心の理論の仕組み)である。IDは物事から意図や欲求を読み取り、EDDは目に似た刺激を検出し、視線がどこを向き、何を指しているのかを読み取る。SAMはそれらを統合して、行為者と対象と自己の間に構築されている関係を理解し、ToMMはそれを認識可能な“心の状態”として翻訳するという機能を持っている。そして、自閉症児から得られた研究では、彼らが、IDやEDDを正常に持っていないが、SAMとToMMに著しい障害を持っていると結論付けている。

現在のところ自閉症は生涯回復しない病気だと言われている。仮に心を読むということができない場合、頼りになるのは、その他の物理的なパターンしかない。自閉症と診断された子どもが社会に適応するためには、あらゆる人々の行動や反応をパターンとして学習していかなければならないのである。この困難は想像に難くないだろう。これは進化の過程で獲得された心の理論が、社会的動物にとって、いかに高度に重要な意味を持っていたのかを最も如実にあらわしているといえる。

(4) 脳の進化と集団の規模

ここでコミュニケーションの根源に関わる社会的知能の進化を考える上で、興味深い議論を取り上げたい¹⁶。人類学者のダンバーは、先のハンフリーと同様に、人間の知能は技術的なものではなくて、社会低知能によって引き起こされたと考えていた。彼がまず着目したのは、先に触れた霊長類の持つ“大きすぎる脳”であった。脳はコストのかかる機関なので、何らかの淘汰が働かない限り“大きすぎる脳”は説明できない。

注目すべきは、彼が行ったサル類や類人猿の“集団の規模”と、大脳新皮質の比較研究である。彼の分析によれば、大規模な集団を維持する種ほど、大脳新皮質が発達しているという相関関係が見られた。彼はこのことを社会的知能の脈絡で解釈している。そもそも群れは、大規模であればあるほど、捕食者に対抗する集団性の利益がある。ただし集団の規模は、増大することで非線形に複雑さを増大させる。集団の規模の拡大は、社会的環境においては、誰が入ってきて誰が出て行ったのか、誰が誰の友人で、誰が一番の同盟者か、

といった対処しなければならない情報が非線形に増大することを意味している。これが大脳新皮質の拡大に深い関係がある、というわけである。

彼はもう一つ面白いデータを引き合いに出す。集団の規模と大脳新皮質との間に、さらに「毛づくろい派閥」の平均規模がともに相関関係にあるというのである。これは群れの集団が大きい種ほど、生活の時間を毛づくろいに費やすということを表している。霊長類にとって、毛づくろいは同盟関係を強化したり、生じた紛争を調停したりするという重要な意味を持っていることを想起しよう。また毛づくろいは互恵的な相互行為であるが、互恵的社会には、しかるべき制限が存在することも重要である。つまり、過度に集団が大きくなると、ただ乗りするフリーライダーが生まれ、フリーライダーの続出は社会集団の崩壊を意味する。したがって、集団の規模に応じて、社会を維持するための毛づくろいの時間が増えることは、まったく理にかなっていることなのである。

興味深いのは、毛づくろいは別の制限をも持っているということである。動物は生活の一定時間を採食や移動のために費やさなければならない。ダンバーがいうには、一般的な群れの規模の最大はヒヒやチンパンジーの 50~55 匹であるが、これが毛づくろいに時間を割ける限界であるという。つまりこれ以上の集団を維持するなら、毛づくろいのために、生活に必要な最低の時間をも削らなくてはならなくなる。

ところがダンバーはこの先に行く。先の大脳新皮質と集団の規模のグラフに、ヒトの脳をプロットしたところ、集団の規模は約 150 人と算出された。ダンバーはここで、農業革命直前のコミュニティの規模や、血縁関係のクラン、それこそ現代の軍隊のユニット、政府の諮問委員会に至るまで、150 人という小集団の単位がヒトの社会に頻繁に現れていることを執拗に述べている。また彼は、ある社会学的な調査結果を引き合いにだし、どうもこの 150 人という人数は、自分との具体的な関係の網の目を記憶に保持できる最大の規模であり、共同体が 150 人を越えると、対等の立場にあるものの圧力だけでメンバーを統制することが著しく困難になるらしい、というのである。

最後にもう一つ重要なことは、ここでダンバーが言語についてこれまでなかったような問題提起をしていることであろう。先に見たように、生態学的に毛づくろいで維持できる集団は 50~55 であるというのに、狩猟採集を行っていたヒトはなぜ、150 人という規模を達成できたのか、ということである。ここにダンバーは言語のひとつの機能を見出す。毛づくろいは同時に二人の関係しか強化できないが、言語は一度により多くの個体の毛づくろいを果たすことができないか。つまり、毛づくろいから言語への移行が“ヒトの 150 人”を説明する鍵だ、というのである。

もちろん彼の議論には、様々な検討の余地を含む問題点があろう。しかし、コミュニケーションの本性を考えるにあたっては、非常に興味深い。

(5) 知能は社会的知能によって生じたのか

本章を総括する前に、社会的知能とヒトの知能全般の進化について、若干補足を入れておこう。これまで私が扱ってきた多くの論者たちは、サル類から類人猿へと分岐していく間に獲得・高度化された社会的知能こそがヒトの知能の根源である、とみなす傾向が強かった。しかし、実際はこの点については論争中である。

先にモジュールについて触れたが、進化心理学者の間でも、知能が機能的に完全にモジュールとして分割されていると主張する論者から、モジュール間の橋渡しこそヒトの創造

性を説明できるという論者まで多種多様である¹⁷。また、知能の発達を、社会的知能ではなく、技術的知能、そして「博物学的知能」に求める議論も根強い。例えば食料となる動物や植物の痕跡を理解したり、採食可能なものとそうでないものを見分けたり、生活空間の認知的な地図を構築できるなど、採食行動に関わる知能も淘汰上きわめて重要な意味を持つだろう。

ここでひとまず、もっとも妥当なのは (依然として仮説の域を出ないが)、認知考古学者のミズンの主張ではないかと、私は考えている。ミズンによれば、類人猿は社会的知能と原初的な博物学的知能を持っていたが、技術的知能・博物学的知能・社会的知能という大きなモジュールの束は、進化を通じて個々別々に獲得されてきた。そして、ホモ・サピエンスにいたって、この領域間の結合が生まれ、それが文化の起原となった、というものである¹⁸。ヒトの知能においては、この三つの領域は互いに深い連関によって結ばれており、切り離すことができないのである。

(6) 「共同的コミュニケーション」について

さて、本章で取り上げてきた議論を通じて、われわれのコミュニケーションを生物学的基礎に基づいた根源的な次元からどのように考えることができるのかを、ここで整理しておこう。ひとまず、次の二点がいえそうである。

第一に、人間におけるコミュニケーションの根源的な様式は、類人猿と分岐する以前に獲得され、のちに高度化した、社会的知能の行使である、といえよう。社会的知能は心の理論を媒介としながら、他者の心の状態を推測し、それに対して適切な行動を取ることを可能にする。そしてこの知能は、相手を欺くためにも利用され、協力関係を構築するためにも利用されるという、進化論的な“二重性”を持っているといえる。

第二に、社会的知能の獲得は、社会的動物の集団の複雑性という淘汰圧から説明され、またコミュニケーションの最も重要な役割は“毛づくろい”が象徴している。集団の規模が大きいことはそれだけ捕食者からの危機を軽減し、狩猟などの便益を増加させるが、大規模な集団を維持するためには、フリーライダーへの対応として、個体間の絆を強化することが不可欠なのであった。

コミュニケーション論を展開している尾関は、これまでのコミュニケーション観に、コミュニケーションの役割をもっぱら情報の伝達として機能的に捉える「情報通信的コミュニケーション観」と、社会的な「交わり」といった意味合いを含む「実存的コミュニケーション観」の二つがあり、しばしば前者が強調されてきたと述べている¹⁹。しかし以上の点から理解できることは、人間の根源的な次元でのコミュニケーションの役割が、前者ではなく、後者に近いということである。

また、尾関がコミュニケーションを考えるにあたって、ヒトが根源的に持つ「コミュニケーション欲求 (または共同性欲求)」について言及しているのは興味深い。先のバーンによれば、類人猿は心の理論を通じて、計算し予測すると同時に、他個体との異なる役割について理解をすることまでできる。しかしヒトに見られるように、感情的に共感している、といった証拠は見つかっていない。類人猿は原初的な心の理論を持っていても、ヒトのそれには遠く及ばないのである。むしろ、自閉症のように心の理論を失ったときに、どれほどのハンディを背負うことになるのかを想起するように、ヒトがコミュニケーション的な作用によってどれほど本質的なあり方を獲得できるのかという点が重要なのである。

さて、以上の議論を踏まえるなら、先のハーバーマスのコミュニケーション論は、社会的知能の研究から明らかになるような、コミュニケーションの契機をまったく考慮していないことが分かるだろう。だましや欺きといったコミュニケーションは、すでにマキャベリの知能として類人猿との共通祖先に由来しているが、これが成果志向のコミュニケーションに該当しても、“毛づくろいのコミュニケーション”はハーバーマスの言うところの了解志向のコミュニケーションには、まったく該当しない。論拠の合理性を志向するコミュニケーションは、近代において獲得されたまったく新しい産物である。ハーバーマスは合理的コミュニケーションの重要性を浮かび上がらせるために、このようなコミュニケーションの次元をコミュニケーション論から捨象してしまったのである。

したがって、われわれの問題意識に即していくならば、コミュニケーション類型の中に、了解志向のコミュニケーションと成果志向のコミュニケーションとは区別して、このような“毛づくろいのコミュニケーション”を導入していく必要がある。私はこのようなコミュニケーションを、「共同のコミュニケーション (communal communication)」と定義しよう。共同のコミュニケーションは人間にとって、もっとも根源的なコミュニケーション様式である、といえる。

3 人間的基盤をめぐる生活世界像—「多層的生活世界」の提起

それでは再び社会的基盤の問題へ移ろう。われわれの課題は、様々な問題を持っている「人間—システム」軸を中心とした社会的基盤を、どのようなあり方によって乗り越えることができるのかを模索することであった。そして第一章でも述べたように、合理的なコミュニケーションに基づく「人間—中間的基盤—システム」というモデルではなく、共同のコミュニケーションに基づく人間的基盤を何らかの形で導入していくことこそ、可能性を持つ展望なのではないか、と考えてきたのであった。

(1) コミュニケーションから見ると、生活世界における社会統合の「二つの様式」

第二章でみてきたように、コミュニケーションの根源的次元を考えるならば、合理的なコミュニケーションは、人間にとって本来のコミュニケーションの様式ではなかった。人間の最も根源的なコミュニケーション様式は、生得的な心の理論を通じた社会的知能を行使し、それによって社会統合を図るといったものなのである。

この視点から「人間—システム」軸の問題性は次のようにいうことができるだろう。高度にシステム化された社会では、人間と人間の間はシステムを媒体としているために、多くの人々が協働していながら、その関係がきわめて一元的で抽象化されている。自らの行動の影響力が誰にどのように波及していくか私たちにはまったく分からないし、自らを取り巻く問題状況が誰の影響力の結果なのかまったく分からない。限りなく多くの側面がブラックボックス化しており、私たちは限られた情報を元に、自らの行動を決定していかなくてはならない。この抽象的な世界は、その意味で心の理論を超越してしまっているのである。したがって、このようなコミュニケーションの立場に立つならば、現代の「人間—

システム」軸は、まったく根源的なあり方でのコミュニケーションの基礎を剥奪した様式なのかもしれない(この点を「具体性の問題」と呼ぼう)。

そのように考えていくと、了解志向のコミュニケーションによって再生産される、と位置づけてきた“生活世界の再生産”についても、見直す必要が出てくるだろう。生活世界の再生産において中心的な役割を果たすのは、了解ではなく、心の理論を通じて具体的に構築できる共同のコミュニケーションの方ではないだろうか。つまり、共同のコミュニケーションこそ、文化的再生産を行い、人間と人間の行為を調整し、そして個人と集団との同一性の獲得を通じて人間を人間ならしめていく、その基礎にあるのではないのか。

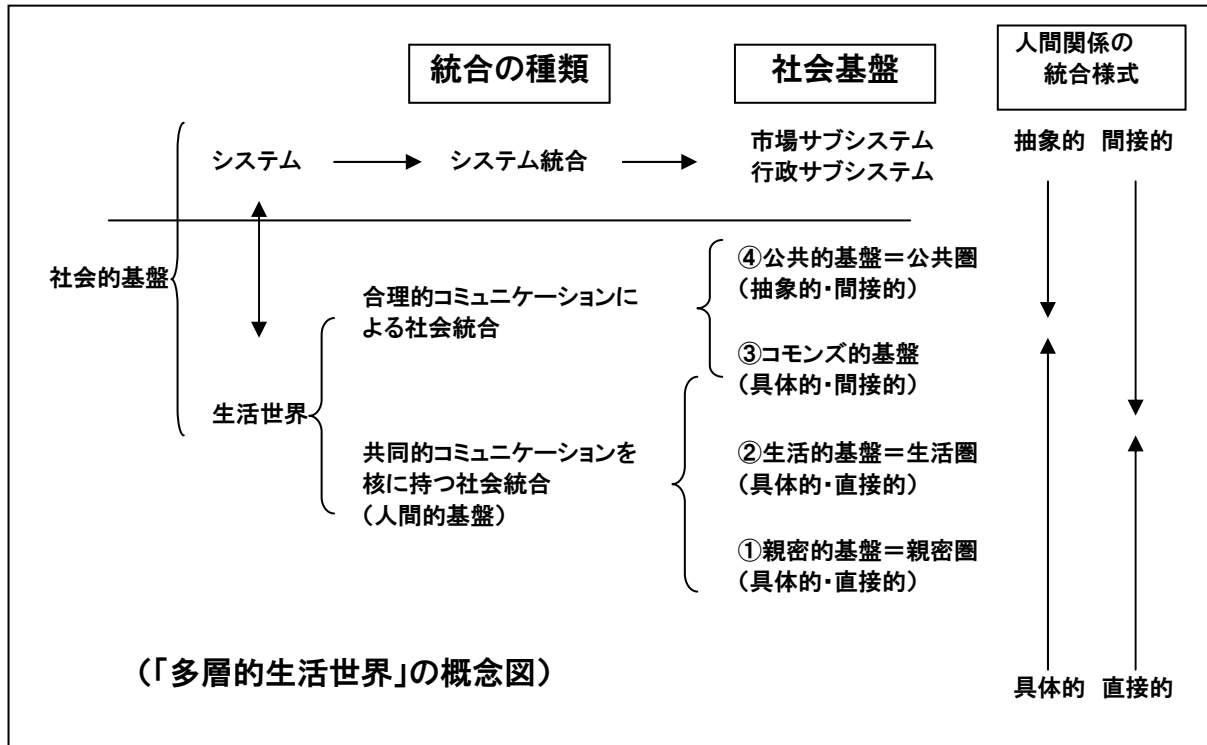
ここで先に取り上げたダンバーは、人間が“具体的に”心の理論を行使できる集団の規模を 150 人としていたことを想起したい。この数字にこだわるためには、より多くの研究成果を待つ必要があるだろう。しかし彼の主張の最も重要な点は、われわれの社会的知能には限界があるのだということ、はっきり示したことである。共同のコミュニケーションは、その本来の様式を保ちながら、特定の規模以上の統合力を発揮することができない。われわれは生物学的には狩猟採集時代からまったく変化していない。われわれの社会がこれほどまでの高度な統合を可能にしてきたのは、共同のコミュニケーションの持つ規模の限界を、高度なシステムを構築していくことによって乗り越えようとしたからである。そして事実それは成功した。しかしこれまで見て来たように、われわれはシステムをあまりに肥大化させすぎたために、結果的にあらゆる社会基盤の側面をシステムに置き換えてしまった。その結果生まれたのが、コミュニケーションによる社会基盤の大幅な変質と縮減、そして再生産の困難という事態であり、そこに問題の根源があったのである(この点を「規模の問題」と呼ぼう)。

私はここで生活世界を統合させるコミュニケーション的基礎を、二つに分けて考えてみようと思う。すなわち、生活世界の再生産を主に担うのは共同のコミュニケーションであるが、新しい様式である合理的コミュニケーションは、それを補うような再生産の様式を可能にした、という視点である。合理的なコミュニケーションの最大の特徴は、それが論拠の合理性に基づくがゆえに、心の理論特有の文脈を必ずしも必要としないということである。共同のコミュニケーションには、顔の見える具体性がきわめて重要な意味を持つが、後者はそれを超越することができる(心を読む機構に、視線を検出する EDD が重要な意味を持っていたことを想起したい)。これはコミュニケーション様式の違いによる、まったく原理の異なる社会統合なのではないだろうか。

以上の視点から、生活世界においては、コミュニケーションの様式の違いに基づき、二つの社会基盤を想定できるのである。私はここで、合理的コミュニケーションに基づく公共圏とは別に、共同のコミュニケーションに基づく社会的基盤を「人間的基盤」として、改めて定義しようかと思う。これはいずれも、「人間—システム」軸を乗り越えるために必要な社会的基盤である。

(2) 人間的基盤と「多層的生活世界」の内部構成

以上の考察を踏まえて、新しい社会的基盤のあり方はどのように描くことができるだろうか。ここにおいて、私は人間的基盤の概念を深化させ、「多層的生活世界」という視点を導入したい(図を参照)。



これまで述べてきたように、社会的基盤はまず、システムと、コミュニケーションによって統合される生活世界に分けて考えることができる。そして生活世界は、先のように合理的コミュニケーションを基礎にする公共圏と、共同のコミュニケーションを基礎におく人間的基盤に分けることができるだろう。ここで私が導入したいのは、人間相互間の統合様式に基づく＜抽象的⇔具体的＞、＜間接的⇔直接的＞という二つの対抗軸である。これは個々の人間がそれぞれの社会基盤を通じて、どのようなコミュニケーションの関係の網の目を基礎としているかを示している。コミュニケーション関係が具体的にイメージできるか、抽象的にしか理解できないか、あるいは、コミュニケーション関係が間接的であるか、直接的であるか、ということである。この指標を導入することで、これまで論じてきた、コミュニケーションの「具体性の問題」と「規模の問題」を考慮に入れることができるだろう。この対抗軸に基づき、人間的基盤は、さらに、「親密的基盤」と、「生活的基盤」、「コモンズの基盤」という重なり合う三つの層として分けて考えることができるのである。以上のように、生活世界を公共圏に還元していくのではなく、コミュニケーションの様式と人間関係の統合様式に基づく四つの層を持つものとして捉えるのが「多層的生活世界」という視点である。

①親密的基盤 (親密圏)

親密的基盤は家族や友人関係といったごく少数の人間と人間を統合する社会基盤である。人間関係の統合様式は具体的かつ直接的で、共同のコミュニケーションによって統合される。「人間—システム」軸の進展した社会においては、唯一システム化を免れた生活世界の領域であった。

②生活的基盤 (生活圏)

これは親密的基盤より広く、日常的な生活 (狭義の生活) の中で接する人間と人間を統

合する社会基盤である。人間関係の統合様式は具体的かつ直接的であるが、やや合理的コミュニケーションも入り込む領域である。しかし依然として中心的には共同のコミュニケーションによって統合される。「人間—システム」軸の進展した社会においては、この領域は“カイシャ”を筆頭にシステムの一部となったため、成果志向のコミュニケーションに比重が傾くことになった。

③ コモンズの基盤 (コモンズ)

この社会的基盤は労働や生態系、地域資源や物質循環と密接に関わる“広義の生活”の領域にむすびついたものであり、今日最も重要性を持つ領域である²⁰。人間関係の統合様式は具体的かつ間接的であることに注目して欲しい。この社会基盤はこの点において、生活的基盤とは区別される。システムの高度化した社会では、この生活の領域が、システムを媒介として高度に抽象化する。労働を通じた人間的結合、居住空間の生態系、消費と廃棄の物質的な流れを、間接的であっても、具体的にイメージできる領域として整備できるかどうか、この基盤の形成に主要な意味を持っている。ここでは、共同のコミュニケーションと合理的コミュニケーションが絡みあう。

そして①、②、③を合わせたものが、本稿で述べる共同のコミュニケーションに準拠する「人間的基盤」を構成する。したがって、①、②、③はおのずと規模の制限をそれぞれの様式に従って持っている。

④ 公共的基盤 (公共圏)

公共的基盤は、論拠の合理性によって統合される社会的基盤であり、生活世界の階層のうち、合理的コミュニケーションに準拠するために、唯一規模の制限を逃れる。この点が、公共圏の最も可能性に満ちた局面であろう。さらに四層のうち唯一システム統合と同様、関係の統合様式が抽象的かつ間接的である。そのため公共圏は非常に流動的な空間であるが、この特質によって、きわめて多様で実践的な経験や知識を迅速に流通させ、自発性に基づく市民組織を形成するための基盤となる。

(3) 展望と課題—結びにかえて

本論では、近代の「人間—システム」軸を乗り越えるための社会的基盤のあり方について、これまで模索を続けてきた。前節では、「多層的生活世界」という視点を提起したわけだが、システムの問題を乗り越えていくためには、システムを前提にしつつ、生活世界における四つの層をそれぞれ構築していく必要があるように思える。公共的基盤はより機能的に、生活的基盤はシステムの貨幣的・権力の脈絡からより自律的なバランスを保つことができるよう整備していく必要がある。そしてコモンズの基盤は、積極的に構築していかなければならないだろう。つまり、「人間—システム」軸とはかわって、多層的に構造化された生活世界を核に、制御された一構成要素としてのシステムがそれを補完するという「多層的生活世界—システム」軸による展望を提起しようというのである。

「人間—中間的基盤—システム」軸によるアプローチは、人間的基盤の要素を、公共圏に還元してしまい、人間に根源的に必要である共同のコミュニケーションの要素を見えなくしてしまう。また、コミュニケーションにおける「具体性の問題」と「規模の問題」を十分に位置づけることができない。そして最大の問題は、区別されるべき、コモンズの基盤と公共的基盤を混同してしまうところにある。つまり公共圏を中心としたアプローチだ

けでは、システムの問題を乗り越えていくために、私たちの“広義の生活”領域において、間接的ではあっても具体的にイメージ可能な領域を実際に構築していくという必要性が見えてこないのである。また、この混同によって、ボランティアやNGOなどのアソシエーションの位置づけも不明瞭となる。アソシエーションは実際には、公共的基盤に足場を置きながら、コモンズの基盤に参画していく主体である。アソシエーションが期待されているのは、地域的・個別的問題を公共圏の議論の場へ暴露し、システムへそれらの問題をフィードバックさせていく役割(公共圏の政治的機能)、そしてシステムがそれ自身の限界によってカバーしきれない隙間に社会的サービスを供給していく役割(公共圏の社会的機能)だけではない。コモンズへ参画することで、コモンズの基盤を実際に構築していくという重要な役割をも担っているのである。アソシエーションは、公共的基盤とコモンズの基盤の絡み合う接点に位置づいているのである。

人間にとって決定的に重要な社会基盤は、人間的基盤に属する領域である。公共圏が活性化するためには、人間的基盤の領域が充実していなければならない。しかし今日、人間的基盤の中でも特にコモンズの基盤を構築していくためには、公共圏がきわめて重要な役割を果たすのである。このような公共圏とコモンズの基盤の不可欠な相互補完性は、以上のように論じてきた「多層的生活世界」の視点を導入してはじめて際立たせることが可能になるだろう。

○本稿に残された課題

本稿に残された課題は大きく三つある。第一に、本稿では共同のコミュニケーションの概念を人間に根源的なコミュニケーション様式として位置づけるために、進化心理学を無批判に取り上げてきた。今後は心理学それ自身が含む問題性について議論し、より多面的にコミュニケーション概念を考察する必要があるだろう。

第二に、進化心理学を経由することで、欺きや出し抜きといった、いわば成果志向のコミュニケーションもまた、人間の根源的なコミュニケーション様式であることが逆説的に明らかとなっている。本稿ではこの問題について十分踏み込むことができなかった。

第三に、もっとも重要なことであるが、社会統合を論じるにあたり、本稿では、文化的・社会的規範の問題を十分に考慮することができなかった。私は社会統合をもつば共同のコミュニケーションの連関として論じたが、ハーバーマスの捉えている社会統合の本質は、コミュニケーション過程それ自体の持つ、規範を生成する局面であった。ハーバーマスのコミュニケーション論の目玉の一つは、コミュニケーションを行為として捉えることであり、ハーバーマスはこの視点によって、了解志向のコミュニケーション過程の持つ、拘束力を伴う行為調整機能を説明していくのである。先に取り上げた尾関は、コミュニケーション類型を、実際には「情報伝達的コミュニケーション」と「実存的コミュニケーション」だけでなく「社会的行為としてのコミュニケーション」を含む三つの様式として論じているが²¹、これも同様の視点による。この社会規範の問題は、今後踏み込んで位置づけていく必要があるだろう。

¹ L・ホワイト『機会と神』(青木靖三訳)みすず書房、1972年。C・マーチャント『ラディカル・エコロジー』(川本隆史・水谷広・須藤自由児訳)産業図書、1994年。などを参照。なお、紙面の関係上近代的世界像とキリスト教との関係は今回は取り上げない。

² R・ノーガード『裏切られた発展』(竹内憲司訳)勁草書房、2003年。

³ システムという概念は、もともと系や機構といった工学的意味合いを含んでいる。ここでは深く取り上げられないが、パーソンズなどの社会システム論を経由し、特有の統合様式を持ちながら恒常性を保つ

- 社会機構を「システム」として論じることはできる。本稿では独自の意味合いをたぶんに含めているが、市場システムや行政システムとして一般的に論じられてきた領域は、システム論的に明確な形で分析可能な“システム性”をきわめて強く持っている。
- 4 本稿では、ハーバーマスの主著である『コミュニケーション的行為の理論』を中心的に取り上げる。特に参照がない場合は、同書に依拠していると考えてもらいたい。J. Habermas. *Theorie des kommunikativen Handelns*. Suhrkamp Verlag. 1981. (『コミュニケーション的行為の理論 (上・中・下)』未来社、1987年)
 - 5 資本主義か社会主義か、といった体制論は本稿ではリアリティを持ち得ない。例えばソ連型「社会主義」が市場システムと行政システムのシステム統合を、単一的に後者によって統合しようとする試みにすぎなかったように、歴史上両者はいずれも「人間—システム」軸による社会的基盤を前提していた。
 - 6 公共哲学は(佐々木毅・金泰昌編『公共哲学(シリーズ)』東京大学出版会、2001~2002年)、公共性論は(山口定・中島茂樹・佐藤春吉・小関素明編『新しい公共性』有斐閣、2003年)、ソーシャル・ガバナンス論は(神野直彦・澤井安勇編『ソーシャル・ガバナンス』東洋経済新報社、2004年)を参照。以前私は、コモンズ論と対比させる形でこれらの論の共通する概観を指摘した。上柿崇英「コモンズ論と公共圏論の結合の試み—『環境の社会哲学』を目指して—」、『唯物論研究年誌』11号、青木書店、2006年。
 - 7 『公共性の構造転換』の序文、および『事実性と妥当性』などに、公共圏や新しい社会運動などに関連させて、植民地化論を深めた議論が展開されている。J. Habermas. *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Suhrkamp Verlag. 1962,1990. (『公共性の構造転換』(細谷貞雄・山田正行訳)未来社、1992年)、J. Habermas. *Faktizität und Geltung*. Suhrkamp Verlag. 1992. (『事実性と妥当性』(河上倫逸・耳野健二訳)未来社、2002年)
 - 8 前掲 上柿 (2006)。
 - 9 S・ピンカー『言語を生み出す本能(上・下)』(椋田直子訳)NHKブックス、1995年。
 - 10 R・ジャッケンドルフ『心のパターン』(水光雅則訳)岩波書店、2004年。
 - 11 本章に取り上げる議論の前提として、進化心理学に関わる以下の二つの論文集は非常に参考になる。L, Hirschfeld & S, Gelman. eds. *Mapping the Mind*. Cambridge Press. 1994. J, Barkow, L, Cosmides, & J, Tooby, eds. *The Adapted Mind*. Oxford Press. 1992.
 - 12 N・ハンフリー「知の社会的機能」『マキャベリの知性と心の進化論』R・バーン、A・ホワイテウン編(藤田和生・山下博志・友永雅己監訳)ナカニシヤ出版、2004年。N・ハンフリー『内なる目』(垂水雄二訳)紀伊国屋書店、1998年。後に引き合いに出すバーンは、ハンフリーのほかにもA・ジョリーの文献も、この議論の先駆的な文献としてあげている。
 - 13 R・バーン、A・ホワイテウン編『マキャベリの知性と心の理論の進化論』(藤田和生・山下博志・友永雅己監訳)ナカニシヤ出版、2004年。A・ホワイテウン、R・バーン編『マキャベリの知性と心の理論の進化論II』(友永雅己・小田亮・平田聡・藤田和生監訳)、2004年。R・バーン『考えるサル』(小山高正・伊藤紀子訳 大月書店)、1998年。
 - 14 A, Leslie. ToMM, ToBY, and Agency. *Mapping the Mind*. Eds., L, Hirschfeld, & S, Gelman. Cambridge Press. 1994. S・パロン=コーエン『自閉症とマインドブラインドネス』(長野敬・長畑正道・今野義孝訳)青土社、1997年。
 - 15 J・フォーダー『精神のモジュール形式』(伊藤笏康・信原幸弘訳)産業図書、1985年。実際にはフォーダーは知能を特化して高速に処理するモジュールと、処理は遅いが総合的に処理する中枢系を想定していた。また心理学では複数のモジュールのまとまりをドメイン(領域)という。
 - 16 R・ダンバー『ことばの起源』(松浦俊輔・服部清美訳)青土社、1998年。
 - 17 前者は(L, Cosmides & J, Tooby. *Cognitive Adaptations for Social Exchange*. In *The Adapted Mind*, eds., J.H. Barkow, L. Cosmides & J. Tooby. Oxford. 1992.)、後者はA・カーミロフ=スミス『人間発達の認知科学』(小島康次・小林好和訳)ミナルヴァ書房、1997年。
 - 18 S・ミズン『心の先史時代』(松浦俊輔・牧野美紗緒訳)青土社、1998年。
 - 19 尾関周二『言語と人間』大月書店、1983年。
 - 20 「コモンズ」は、環境社会学や生命系経済学などで論じられるコモンズ概念を意識している。今回コモンズ概念については深く掘り下げられないが、以前私が「コモンズの再構築」という言葉を用いて論じた領域は、この社会基盤に該当する。前掲 上柿 (2006)。
 - 21 尾関周二『〔増強改訂版〕言語的コミュニケーションと労働の弁証法』大月書店、2002年。